

戦時中の『亞細亞』と戦後の『新生』 ——「中支」に発行された二種の邦字誌を巡って

陳 齡

はじめに

昨秋、ワシントン D.C.にあるアメリカ議会図書館 (Library of Congress) で二種の雑誌と邂逅した。戦時中汪兆銘政権下の南京で発刊された月刊詩誌『亞細亞』と戦後間もなく上海で発行された旬刊綜合誌『新生』である。両誌とも民国時代、「中支」に在留していた十数万とも言われる日本居留民を主たる発行対象とした邦字誌であるが、前者は二冊あるうち、第二号は日本国内未見の希覯でありⁱ、後者についても全容が紹介された形跡はない。本稿では、この二種の刊行物の形態、発行背景、執筆者及び掲載内容について資料紹介をしつつ、検証を試みたい。

1) 戦時中発行の詩誌『亞細亞』

『亞細亞』は戦時中に日本が掲げる大東亜共栄の理想と日本精神の謳歌、士気の鼓舞などといった宣撫活動を目的に、主に南京と上海を拠点に活動していた日本の詩人たちによって創刊された「詩雑誌」であり、1942年から1944年にかけて発行された「文化研究雑誌」なる『黄鳥』ⁱⁱに続き、南京に居を構えていた草野心平が編輯兼発行者となって世に送り出されたもう一種の邦字誌でもある。時は草野が中華民国中央政府宣伝部部長で嶺南大学時代の同窓だった林柏生の招請に応じ、同宣伝部専門委員として南京に赴任して四年目、東京で『歷程』を発刊して十年目の年。同人には南京在住の上路忠雄、漢口在住の小林定治、東京在住の川鍋東策の他に、朝島雨之助、会田綱雄、池田克己、岩井五郎、兼松信雄、黒木清次、中里廉、緑川昇、室伏クララ等上海在住の詩人や文化人が名を連ねている。また、発行所は『亞細亞』の奥付に拠れば、草野の職場で亜細亞社が置かれていた南京瑯琊路十一号となつてはいるが、印刷者と配給元はそれぞれ上海にある

太平出版印刷会社と内山書店になっていることから、生え抜きの『黄鳥』に対し、『亞細亞』は南京で胚胎し、上海で誕生したものとも言えよう。

今回筆者がアメリカ議会図書館で撮影できた『亞細亞』二冊は1944年7月発行の『創刊号』（図版一）と同11月発行の『第二号』（図版二）で、A5判、本文30頁なる複写本である。表紙は創刊号は赤と黒に彩色された文字と飾り線、第二号は僅かに「原始獣骨文字」の図案が添えられたシンプルで、それだけで雅趣のある作りとなっている。

『亞細亞』の誌名について、発行者の草野が第二号「後記」に、「亞細亞は廣く、亞細亞は幾つでもありそして一つだ。『亞細亞』が全亞細亞の詩人達の磁場にまで育つてゆくことを私達は願つて止まない」と記したことから容易に想起できよう。また、「『歷程』に限らず外の優秀な詩人にも」、「中国の詩人にも書いてもらふ」とし、同人や内地の詩人に限らず、外地の詩人も幅広く迎え入れようとした姿勢を窺わせている。

こうした姿勢は既に『黄鳥』時代から鮮明に打ち出されておりⁱⁱⁱ、「亜細亜」という符牒めいた言葉が戦線拡大の中で、嘗て「内地」に相對する「外地」である「大陸」や「満州」、「台湾」、「朝鮮」、「昭南」等の運命共同体と共に強く刻印されていった背景があったことが看過できない。

實際企画や編集に携わった池田克己が『創刊號』の「編輯後記」に一層踏み込んだ趣旨を記している。

……南京から心平さんたちの「黄鳥」が出、上海から私共の「上海文學」、北京から「華北詩人」、濟南から「廟」などが出るやうになり、夫々活潑な仕事が見られるやうになった。

この事は、一寸氣取った言葉を使はせて貰ふなれば、中國に住んでゐる



図版一



図版二

日本人の夢の純粹さといふもののギリギリな現れと云ふべきであらう。

戦ひはげしい今日にあつて、詩の雑誌が、私共のたのしい自信の中で生まれるといふことは、このことをヌキにしては考へられないことであるからである。

文学誌の発行は「日本人の夢の純粹さ」を反映するものであり、就中詩誌は「たのしい自信」を持っているが故に生成可能であると、戦争が日増しに激化していく中における『亞細亞』の創刊の意義を唱えている。

その編集発行の段取りについて、

……心平さんとの話しであつた中華民國在住の全日本詩人をもつて出される雑誌への過程の第一歩として、ここに「亞細亞」が生まれることになつた、第一輯は、漢口、南京、上海、つまり揚子江流域に住む詩人だけが集められたけれど、将来、北支、南支などの詩人の参加を迎へられる筈である。

更に又、中國現代詩人の紹介なども旺盛にやつて行きたい考へである。

『亞細亞』が具體的に計畫せられて、も早三ヶ月余も経つてしまつたけれど、これからは毎月確實に出したいと思つてゐる。

と当初計画していた「中支」を皮切りに、次第に中国全土の日本人詩人乃至「中国現代詩人」を取り込みながら、「毎月確實に出」す詩誌に仕上げていくとする構想と意気込みが手に取るようにわかる。ところがこれに反し、創刊号のお目見えが予定より三ヶ月余り遅れたことや、第二号の発行が創刊号から四ヶ月後のこと、且つ発行は二号を上梓したところで終刊した^{iv}ことなどから『亞細亞』の刊行には計り知れない艱難辛苦があつたものと察せられる。それは戦事長期化に伴う書誌の発行制限や紙の供給不足^vが背景にあつた一方では、同三月に病氣治療のために日本に渡つた南京国民政府主席汪兆銘が11月に名古屋帝国大学医学部付属病院で病死したことによる政局の不安、また同月に第三回大東亜文学者大会が南京で開催されることによる同人の多忙が一因にあつたことは想像に難くない。『亞細亞』の発行の遅滞には「日本人の夢の純粹さ」を表現しようと希う同人の情念と敵たる現実との間に大きなギャップがあつたことが窺い知れよう。

2) 『亞細亞』に見る同人らの詩

茲で『亞細亞』の掲載内容を創刊号と第二号の目次（図版三、図版四）より概観した上で、第二号を中心に内容を要約したい。なお、目次と中頁の表記の違いに適宜調整を加えた。



図版三



図版四

『亞細亞』創刊號 Aija (Asia), Nanking Vo1.—No.1, Date: July 5, 1944

創刊號目次

草野 心平	大白道	2 - 3
黒木 清次	傳令	4 - 5
朝島 雨之助	雨に暮れる油公司草原	6 - 8

詩二編

緑川 昇	生命の歌	9 - 10
	日本の朝	10-11
岩井 五郎	海と石子陵	12
中里 廉	花の章（日本の歌）	13
室伏 クララ	繁星の下一南京廣州路	14
兼松 信夫	市一蚌埠印象	15
池田 克己	壮行（私の應徴昭和十四年八月二十日のために）	16-17
上路 忠雄	溶岩	18-19

小林 定治	漢口の夕暮れ	19-20
川鍋 東策	手紙	21-22
	亜細亜同人住所録	22
朝島 雨之助	詩のこころざしに就て	23-27
緑川 昇	「詩領土」の創刊を祝ふ—路易士氏への手紙の形式にて	27-29
黒木 清次	我が戒律	29
池田 克己	編輯後記	30
	詩壇消息	30

『亞細亞』第貳號 Aija (Asia), Nanking Vo1.—No.2, Date: Nov 20, 1944

第貳號目次

緑川 昇	ねぎうた (祝歌)	2
藤島 宇内	鷺	3 - 4
橋本 欽	銀山平	4
會田 綱雄	生木	5
會田 綱雄	應酬	5
兼松 信夫	大陸孟夏の詩	9 - 10
草野 心平	竹	10
中里 廉	插(掙)話—例へば花のやうな	11
室伏 クララ	骨	12
岩井 五郎	或る日	12-13
岩井 五郎	日暮	13-14
西園寺 公一	彌一は征く	15-17
朝島 雨之助	岩山の彼方なる	17-20
朝島 雨之助	青笛の歌	20-21
黒木 清次	わが母のうた—豫科練に行く弟と共に	22
上路 忠雄	天動説	23-24
池田 克己	詩人路易士	25-26
池田 克己	黄昏	

	六號記 ^{vi}	
草野 心平	雑雑	6 - 14
池田 克己	小野十三郎	27
	詩壇消息	28-29
池田 克己	後記	30

『亞細亞』創刊号と第二号の共通する執筆者十人の外、川鍋東策と小林定治が遠方にいたためか、第二号への投稿が無い代わりに、第二号には新たに藤島宇内、橋本欽、会田綱雄、西園寺公一の四名の詩作が加わり、内「鷺」の作者藤島宇内は「まだ若い学生で」あることや、「彌一は征く」は当初は発表の目的ではなく、「私信のつもりで」草野に「寄越し」た西園寺の処女作であったことが草野の「後記」から読み取れる。また、越後「銀山平」の初夏を詠んだ橋本欽は鳥見迅彦（本名橋本金太郎）のことで、戦後『歷程』の同人にもなった人物である。『黄鳥』にも度々寄稿した会田綱雄が書いた「生木」は友人に頼まれて雇った現地の少年の名を題目にしたもので、無邪気な少年と主人との心むと交流の風景が行間に滲み出ている。「應酬」もまた中国語を交えた短章で、笑顔が綻ぶような情景が恬淡に詠まれている。

また、主宰の草野は創刊号に「大白道」、第二号に「竹」、「雑雑」の3篇を載せているが、詩集『大白道』が東京甲鳥書林により刊行されるとの広告が『亜細亞』創刊号の中頁に載ったものの、詩集のタイトルにもなった「大白道」は当局の厳しい検閲に遭って却下され、結果的には『亜細亞』創刊号の掲載が初出となったことが以下の朝島雨之助による「詩集評」（第二号）の記述から瞥見できる。

この程から「亜細亞」の同人の詩集が次々と出版せられ、(中略、筆者) 詩集「大白道」は同名の詩の題を採つたものだが、この本の中で一番傑れてゐると作者も自信し僕らも認めるその詩が、都合で本集に掲載禁止となつたのは作者と共に誠に残念である。(尚、その詩は「亜細亞」創刊號に發表されて居る。)

現に『亜細亞』に載せられた「大白道」は『草野心平全集』（筑摩書房、昭和

53年～59年)に収められている同名の詩と照らし合わせると、随処に改筆があったことが判った。これは過去の検閲の苦い経験に由って全集収録時に幾分表現を和らげたと思われる。また、「竹」の詩にも「竹百本」と「竹千本」の単純な数の表現の違いが確認できる。散文「雑雑」に至っては、自分が「八ヶ月～殆ど何も書かなかつた」ことに触れ、これは「全くの怠惰である」と自己剔抉を見せたり、嘗て「アジアの幻想の風景、言はば別の意味での私の蛙であり富士山であるのだが、もつと幻想だらけのアジアの景色」を書きたかったのだが、それも書けずに「ぼんやり月日だけが立つてゆ」くのだと無為徒食の日々を嘆いたりする。続いて、『陶晶孫日本文集』を取り上げ、「私には小林秀雄や保田與重郎の批評は面白い。そしてここに陶晶孫の批評もまた面白い。」何故なら、「彼は中国をよく知つてゐ」て、それも「傳統と愛が無ければ、己れの國も理解することは不可能」であり、「廣い大きな範囲の人々にこの本が讀まれたらと本當に思ふ」と評する。更に、「梅原龍三郎の『ルノアールの追憶』を讀ん」で「感動した」ことや、禅月大師の「十六羅漢図の本物を見た」く、「あれを詩に書きたいと思つ」たり、「梅若萬三郎の『足』の詩を書かうと思ひ立つ」など、文人・詩人ならではの関心を綴っており、最後には、「日本には今詩の大天才は居ない。〈中略、筆者〉けれども、〈中略、筆者〉凡ゆるその他の國々の詩よりも一番抜きんでて立派なのは日本の詩だ」と詩人としての使命と自負を雄雄しく語っている。

3) イデオロギーと純文学の狭間

『亞細亞』は戦時戦後中国において発行された数多の邦字誌の中でも希観の詩誌である点に注目したい。草野はこれに先立って上梓した『黄鳥』第二号「編輯後記」に次のような言葉を残している。

中支に於ける文學はいまや澎湃として勃興の機に臨んでゐる。日本人側は漢口の「武漢文化」、南京の「黄鳥」、上海の上海文學(未刊假名)、杭州の「浙江文化研究」、南京の「江南史地論叢」等、何れも言はばそれぞれ小規模な文化雑誌といはるべきものであるが、やがてはこれらのなかから純文学雑誌も生れることであらう。

中國側は中支に於ては純文學雑誌は南京に於ける「作家」だけであるが、)

三月には上海に「風雨談」が発刊されるし、(、) 南京からも「中國文藝」(假題)が刊行される。この傾向は今後益々強力に展開されて行くだらうと思はれる。欣快に堪えない。

戦争の最中においても「純文学雑誌」の盛況を願う詩人草野の偽りない胸中の吐露である。こうした思いが現実化された『亞細亞』は「詩誌」の性格を有するだけに「純文学」の要素を帯びたものに疑いようがない。ただ、戦争のコンテクストの中であって、緑川昇の「ねぎうた」や藤島宇内の「鷺」、中里廉の「掙話」、朝島雨之助の「岩山の彼方なる」、青笛の歌、上路忠雄の「天動説」のような時局の要請に応える翼賛性質の詩がある一方では、『亞細亞』には例えば前述した草野らの詩以外にも、室伏クララが「骨」(私のほねが／机に向かつてゐる／そのかたち)で自らの窶れを映し出した詩や黒木清次の「わが母のうた」に込める母への想念、池田克己の「黄昏」に見られるような心境描写などの詩が散見されている。これらの詩には激烈緊迫した戦場から厭離させてくれるような平和と静謐が漂っていて、戦地にいる詩人の憂鬱さえ読み取れるのである。その意味では、『亞細亞』は草野の「純文学」への理想が幾分実現された要素も内包したもので、誌名から想像されるようなイデオロギーに同調したプロパガンダ誌とも言いきれないところがあるのかもしれない。

4) 戦後に呱呱の声をあげる『新生』

終戦して凡そ半年が経過した1946年3月から同年6月にかけて上海を舞台に新たに誕生した旬刊『新生』(図版五、創刊号表紙)は、日本が敗戦を喫したため、それまでの大方の邦字誌は日本側が発行者となる形態が一変し、戦前の中国国民党「中央宣伝部対敵宣伝委員会」から戦後の「中央宣伝部対日文化工作委員会」と改名された上海分会が発行主体となったところに特殊性がある。創刊の目的は在上海日本居留民や敗戦後日本国内への引き揚げが完了していない官兵への民主主義の宣伝教育、日本新生の



図版五

推進などにあったのだが、創刊当初中国側と編輯を依頼された日本側の朝日新聞特派員だった須田禎一側との間で蒋介石の写真を巻頭に入れるか否かの問題を巡って確執があり、暗礁に乗り上げた一幕もあったものの^{vi}、最終的には、加藤哲二を編輯長に、武田泰淳、堀田善衛、小島實、磯田進らの寄稿によって発行にこぎつけた経緯があったようである。またこの時期の堀田善衛の日記（紅野謙介編著『堀田善衛 上海日記〈滬上天下 一九四五〉』〔2008年11月、集英社〕）にも『新生』に関連する箇所が見られ、1945年10月17日付の記述では、「頃日の動揺の一つは、中国側の機関へ入って働いてみようかといふこと」とある。この「中国側の機関」は即ち中国国民党中央宣伝部対日文化工作委員会のことで、堀田は後にその徴用に応じて『新生』の編集に当たっている。また、1945年12月13日付の日記では、「……須田氏との話し合ひで、中央宣伝部対日文化工作委員会で出す日文雑誌『新生』に原稿を（『風立ちぬ』十五枚）書き、ついでに編輯を手伝ふことになった。編輯名单（編集者名簿＝筆者）は須田禎一、中尾、円谷、大平、名和、林、と僕の大体七人である」とある。下記の『新生』創刊號の目次に拠れば、「風立ちぬ」と題した文章は後に「文学の立場」と改題されて掲載されていたことが分かる^{vii}また、須田の脱退に伴う編輯部の人員の入れ替わりがあったようである。

ところで、堀田善衛の日記より『新生』誌の存在の事実は知られていたが、今日までその所在が確認されてこなかった。この機会にその全容について紙面を割いて詳述する意義があると考えるが、なにぶん著作権の問題や紙幅の関係上原文の掲載を割愛して、ひとまず全6冊の目次のみを載せるに留めたい。



図版六

『新生』 1946. 3 -1946. 6（中央宣伝部對日文化工作委員會上海分會發行）目次^{ix}

創刊號（三月一日）（図版六）

創刊の言葉	1
世界平和への道	2 - 3
= 日本徒手官兵に告ぐ =	

會議の精神	磯田 進	4 - 8
= 民主主義的な (下の) 會議について =		
〔民主主義講座〕第一回		
日本の民権思想	加田 哲二	9 - 11
蔣主席の言葉		11
美しき東洋の友情	塚本 助太郎	12-13
執筆者紹介		13
黒うた鳥	小島 實	23
(詩) 文藝復興	西崎 哲夫	30-31
中國文學と世界	武田 泰淳	14-18
(短歌) 故郷を憶ふ・集中營雜歌	鈴木 志津江	32-33
(短歌) 水仙	辻 ちゑ子	22
(短歌) 斷片	大平 善治	22
文學の立場	堀田 善衛	29-33
〔中國文化通信〕		
國際聯合總會に就て(ニュース・ポイント)	森 亮三	20-22
往(徃)時の上海渡航	沖田 一	26-28
〔新生新語〕「日僑」はかく(う)考へる	S・H 生	19
寺小屋めぐり 一繪と文一	可東みの助	24-25
名詩名譯 一車塵集より一	佐藤 春夫	28
ともし火の教へ		
秋の別かれ		
むつごと		
旅びと		
第二號 (三月十一日)		
大同の意義		表紙裏(表二)
卷頭の辭		1
日本青少年諸君に告ぐ		16-17
再び明治維新の心にて	田川 大吉郎	2 - 5

= 日本生活問題特輯 =

日本の人口と食糧問題	廣瀬 庫太郎	13-15
日本出版界斷片	X・Y・Z	15
日本は生存し得るか	甲野 哲夫	6-9
—日本經濟の諸問題—		
(詩) 大渾沌より龍たちのぼる	草野 心平	21
[中國展望] 和平建國への胎動	山中 三郎	10-12
〔民主主義講座〕 第二回		
日本政黨の發端	加田 哲二	22-25
モナ・リザ	巴金／柴 三郎 譯	30-33
中國の子供會	戸塚 廉	28-29
[中國文化通信]		30-32
(隨想) 歸國前	本田 恭之	26-27
[國際展望] バアنز聲明を中心として	森 亮三	18-20

第三號 (中日文化交流のために) (四月十日)

武装せざる平和	高村 光太郎	表紙裏(表二)
卷頭の辭		1
歸國日僑に告ぐ (寄す)		2-3
民族文化と世界文化	孫 科	4-5
日本政治の道程	百武 末義	6-8
日本總選舉の見透し	鹽見 聖策	9-10
[中國展望] 轉換期の前夜	山中 三郎	22-23
[國際展望] 國際的岐路の打開	川村 信一	23-24
〔民主主義講座〕 (完)		
日本の政黨	加田 哲二	11-13
日本國民へ	ジャワハルラ(-)ル・ネール	21
人民大衆に見習ふ	郭 沫若／富岡 朗 譯	16-17
玉水兄弟のこと	向田 寛一	14-15

——隠れたる犠牲者の群れ——

中國民俗抄		20
中國には中國の尺 〔抗戰地區の想出〕	内山 完造	18-20
ある日本女醫のこと	榛葉 修	18-19
うどんの語源	小畠 實	28
風味隨筆	小宮 義孝	26-28
ある忠烈な物語	臧 克家／室伏 クララ 譯	29-30
(戯曲) 郁達夫の死 (一) ——一幕二場——	菊池 租	31-33
(詩) 日本なる妻と子を想ふ ——抗戰中に歌へる——	杜 運燮／二宮 文章 譯	25
	伊藤 研之 (絵)	表紙

第四號 (中日文化交流のために) (四月二十五日)

廣く世界的に見て		表紙裏(表二)
深く人間的に考へ		
正しく判断しよう		
これが民主主義の根本なのだ		
卷頭言		3
在華日僑に寄す	中央宣傳部	4 - 5
中國近大事記		4 - 5
〔新生新語〕		
上海に残る	林田 俊衛	6 - 7
中日問題の將來について	編輯部	8 - 9
一田川大吉郎氏に聽く		
〔集中區生活記録〕		
(喫茶店放送) 点心	黒木 圭	10-12

(生活報告) 敷衍について	武田 泰淳	13-15
(復員者の手記) 友人への手紙	向山 寛夫	22-24
[中國評論]		
新民主運動と文藝	以 羣/室伏 クララ 譯	16-19
總選舉と日本政治 (界)	劉 秋	22-23
時代と青年	加藤 和	25-26
[日本便り]		
日本の娯樂界		17
民主主義の研究熱 一活氣づく各大學		19
新舊円交換		11
(中國隨筆) 東京の想出	朱 紹文	20-21
獨白	榛葉 修	26
(詩) 歸るひとに留まるひとに	目黒 寺雄	15
(詩) 九月十七日のこと	岩井 五郎	28-29
[中國文化通信]		20-21
日本陸軍最後の日—終戦の三條件		27-32
未だ復員せざる在華日本徒手官兵諸君		32

第五號 (五月十五日)

中國のポスター	伏木 海之	表紙裏(表二)
卷頭言		1
國民黨と國民政府と中華民國	林 俊夫	5 - 7
[新生新語]		
五・四所感	二宮 文章	8 - 9
[新聞時評]		
重慶新聞界の現況	趙 望	10-12
[歸國者各位へ]		
愛國心の在方について	修 育仁	2 - 3
よい子、よい國をつくれ	高 健(建)子	3 - 4
女のころ	黄 節文	4

容海學校の想ひ出	星野 芳樹	16-18
地下に眠れる戦友よ	清水 信雄	10-13
(詩) 祖國詩篇	濱松 清	13
(詩) 生きてゐた英靈は唄ふ 〔上海便り〕	岸 一夫	28-29
上海漂流談	沖田 一	14-15
日本に進駐する中國軍訪問記		14-15
上海雜話	X・Y・Z	18
中國の俗諺		裏表紙(表四)
中國のポスター 〔戯曲〕	伏木 海之	(扉)
郁達夫の死 (完)	菊池 租	19-26
郁達夫氏覺書		21
かくて果つ日本聯合艦隊	本會資料科編	27-33
生きてゐた英靈は唄ふ (詩)	岸 一夫	28-29

第六號 (六月十五日)

中国語と日本語	外山 半造	表紙裏(表二)
卷頭言		1
日本憲法草案私見	趙 南柔 / 河村 義保 譯	2 - 5
国府改組と人事移動		5
文化國家への道 ——青年の立場から——	加藤 和	6 - 7
〔新生新語〕 或る杞憂	二宮 文章	8
星暗き夜に聞こゆもの	榛葉 修	9 - 11
〔遠東觀察〕 日本管理を論ず	神州日報	9 - 11
上海新聞界の現況 ——新聞時評—— 〔最近中国要人談叢〕	王 季深	12-16
中米蘇の關係 孫科立法院長談		12-13
經濟と教育 蔣行政院秘書長談		13-14

政治及び経済 彭中宣部長談		15-16
整軍問題 陳誠三青書記長談		16
中国の色彩と模様（於中國民俗研究會講演）		
	魏 景山	17-19
日本の政治家達	凌 俊民	17-18
（民謡）宵待草・蛋歌二首	松井 秀吉 譯	19
中國人には辦法あり ——蘭州雜碎——	茅 盾／柴 三郎 譯	20-21
曉を前にして	羅 青	22
くつほれし心	丁 玲／小河 正兒 譯	23-26
本會の放送について		26
〔中國文化通信〕		26
（戯曲）丹頂の血（一幕）	洪 深	27-33
（詩）迫害	馬 蔭隱	30-31
中国の習慣	俊民	裏表紙(表四)
編集室から		裏表紙(表四)

『新生』誌はB5判、本文は内容によって様々に段組みされ、33頁を一冊とする。創刊号から第五号までの定価は100元、第六号の定価は200元とここでも紙の高騰が見てとれる。誌面内容の構成は時勢の評論、民主主義についての講座、文学創作・翻訳、文化通信、現地の情報など多方面に及び、執筆陣も大学教授・助手、芸能研究家、文学研究家、博物研究家、文藝評論家、漫画家など多岐に亘っている。

『新生』創刊の目的について、「創刊の言葉」では、「われわれが『新生』を創刊する目的は、日本をして新生の途徑を進ましめようとする念願からである。われわれは世界の一國として、また東亞の一國として日本の人々とともに歩むことを欲する。日本國民諸君もともに努力して、新しい世界の創造に努力しようではないか」と記している。

また、『第二號』「巻頭の辭」では、「民族にはそれぞれの傳統があり、それは「民族の精神を支配」するもので、場合に「神國論となり、君主現人神論となつて現はれて來」た時に、「一國の方向を誤らしめる要因を含むものである」とし、「日本の天皇が新年の辭において、これらを訂正してゐることは日本の思想

のために喜ぶべきことであり、この訂正の結果を實際政治の中に實現するならば、日本は民主的國家として再生し得るであらう」と主張する。

続いて、『第三號』の「卷頭の辭」では、「新生日本の文化建設課題は」、「封建的動文化よりの脱皮と民主主義文化確立への発足でなければならない」と断じ、それを實現するためには、「國民生活そのものに於ける一般文化の民主主義的高揚と裏付け」る必要があるとした上で「中日及び世界文化交流に對して、光輝ある將來を約するものであることは言ふまでもない」と日中間の文化交流への期待を寄せ、最後には「吾人は新生日本の民主主義文化建設に對して満腔の賛意を表するものであり、數千年に渉る同文同種兩民族交流を基底とせる隣人愛を以つて援理解の立場にあることを繰り返へし宣明する」と力説する。

『第四號』「卷頭言」では、「日本天皇を神格視してゐた日僑は頗る多かつたが、大部分は天皇の大権を制限して存置せんとする思想が濃厚である」とした上海で行われた輿論調査の結果をもとに、「民主日本の新生を確信はし得ても、なほ一層、日本人諸士に民主政治に對する廣き世界的視野と、深き人間の省察と正しき具體的判斷を希望する」と更なる民主の推進を呼びかける。

『第五號』「卷頭言」では、戦後の審判を踏まえ、「我々は今日既に日本官民の過去に犯した罪禍の渺小なるものは問はぬ。又、今更執拗に機械的な反省を求めたりも最早やしないし、軍閥の死屍に鞭うつことも我々の好むところではない。しかし、侵略戦争の發動者は、決して有終の美を飾ることが出来ないのだ。アジア各地からの潮の引くが如き敗退の後に残された「萬世遺臭」について日本人各位の人間的な人生的な省察こそ今は望ましいのである」と論陣を張る。

『第六號』「卷頭言」では、「敗戦に消沈してゐた民心が、再び人間らしい本性に目覺め、戦勝に酔つてゐた人民が、再び人民としての本態に生きようとするとき、その民族、その國民に相應しい一つの方向が現れて來るのである」とし、「世界は今や再び、獨裁政治より離脱し、人民の意志を尊重する民主主義的政治に向はんとしてゐるとき、日本民族もまた、激情に走らず（、）公正妥當なる日本民族の政治的の大道を邁進せんことを希望する」と声高に論評を展開する。

過去の過誤を正視し、新生日本の進むべき方向と方策を示す使命を『新生』が担うのだという趣旨の文言が随所ちりばめられている各号の卷頭言である。また、これを裏打ちするべく「民主主義講座」のコラムを設け、民主主義精神を説くのを筆頭に、「國際展望」、「中國展望」に於いての政論、「帰国者各位へ」「上海便

り」などのような情報提供、更に詩や短歌、随筆、戯曲などといった文学創作などを包摂した広範な内容が載せられている。紙幅の関係上、ここでは特に次の文学評論に焦点をあて、本文の紹介を中心に据え、検証を進めていく。

5) 武田泰淳の「中国文学と世界」(図版七)

『新生』創刊号に載せられている「中国文学と世界」は武田泰淳が当時の中国文壇に対する知見に富んだ文学評論であるが、『武田泰淳全集』に原文そのものの収録は見られない。『新生』の数少ない文学作品の中から特に取り上げて詳述に値する一篇だと考える。

まず武田は林語堂の『北京好日』(*Moment in Peking*)の日本語訳を読み、その後英文で記された原作の上海版原書を神田で購入し、「東京の片隅で味はう不思議さに浸りながら、冬の夜をすごした」と切り出した。そして、「歐米人に訴へる一大



図版七

長篇の作者として突如出現したことは」日本の中国文学愛好者にとって驚きであり、中国の抗戦開始後間もなく、「北京の知識人の生活繪巻が世界に向かつて発表されたこと」、中国民族が重慶へ移動する時、「作中の一老人は老子的な達観に守られながら」、民衆の西部流入を見て、「中国が新しき出発を始めたことを祝福し豫言してゐたことなど」を想起せずにはいられないと綴る。

また、作者自身が原書から中国語訳した『啼笑皆非』(*Between Tears and Laughter*)に対しても、「中国文学と世界の問題を包含」する「堂々たる世界論」とし、「ことごとく輕妙にして大膽なる世界論」であり、「見方によつては、すべてが有能なる雄辯者の文章と定められるかも知れない」と前置きをし、「彼が『世界』を前にして、『現世』を觀察した態度の奥には、かつての文学者精神は失はれてゐなく、「戦争評論家に對する適切にして痛烈な批判の背後には、やはり詩のやうなもの、祈りのやうなものが流れ漂つてゐると思はれ」、それは「老莊の言葉の中に救ひの光りを求め」、又は、「孟子の人間論の正しさを再びとりあげて見せる」ものとし、「世界の評論家に伍して、中国の立場から、中国のために、

ひいては世界のために憂へに沈み、想ひにふける誠だけは否定し得ないであらう」と氏の形式的には文学から逸脱しながらも、内容的には純粋な文学の要素が包含されている創造に対し一定の理解を示し、賛辞を送っている。

ところでやや脱線するが、林語堂の英文小説 *Moment in Peking* (中国語名『京華煙雲』、日本語名『北京好日』)は The John Day Company により1939年にニューヨークで出版された長篇小説で、出版して間もなく、鶴田知也、小田嶽夫、藤原邦夫による複数の日本語訳が出されていた。ところが、時局の制約を受けた訳者が訳本に対して意図的に省略や改竄を施し、必ずしも原文忠実の訳し方を貫徹していないが故に、それを讀んだ谷崎潤一郎は「世界戦争と云ふ未曾有の大事件が起こつてゐながら、それが経済的にも社会的にも何等影響を及ぼしてゐないやうに見える」と作品内容を捉え間違えた^{*}との指摘がある中で、「上海版の原書」を讀む機会が得られた武田はいささか幸運であつたようにさえ思はずにはいられない。

武田は続いて中国の古典を踏まえながら、彼独特の中国文学論を展開していく。

「たとへば彼(林語堂、筆者)は、一夜西風が碧樹を凋ませたとき、獨り高樓に上り、天涯の路を望み盡さうとしてゐるのである。彼ばかりではなく、世界的混沌の中を異國に旅し、異族に接する人々は、自己の眼力の及ぶかぎり、おのづから天涯の路を望み盡す文學的境界に入るのである」と、ここで王国維が『人間詞話』で詞の第一境界とした晏殊「蝶恋花」の「昨夜西風凋碧樹、獨上高樓、望盡天涯路」の一句を援用して、異國独居の作者の心境を共感を以て代弁したと受け取れる。また、林語堂のみならず、胡適は「藏暉室劄記」を以て、冰心は「小きき者への手紙」を以て中国文学の世界性を物語っているのであり、彼らも皆「獨り高樓にのぼつて、西の方、あるひは東の方、精神の天涯を望みつくさんと様々な努力をした」とし、「田漢、郭沫若、郁達夫等創造社の人々、周樹人兄弟のごとき日本留學生出身の作家の運命も」皆この「中國文學と世界の一つの問題」と結びつけて考えられるとする。更に、郭沫若が「蘇聯紀行」において述懐する詩を紹介し、その詩は自らを「浮雲低き天末を翔ける孤鴻」に譬え、下界を見下ろすにあたって、「情熱」、「文藝」、「自己の誠實」のために憔悴しても悔いない心情を示したとして、「追求する対象のためには瘦せおとろへ、衣帯も漸く寛なるを覚ぼえつゝ、しかもなほあこがれをつづける態度」即ち、ここで『人間詞話』が説く第二の境界に当たる柳永「蝶恋花」の「衣帯漸寛終不悔、為伊消得人憔悴」

に一層高めていくのである。

また一方では、巴金の「旅途通訊」、「香港行」、「桂林の微雨」の抗戦「八年間に貯へた憔悴とあこがれの量が、次第に天涯を望み盡し得る高さにまで、積まれつつあつたことが察せられた」とも言い、短篇集『還魂草』は「手紙の形の小説である物々しく、荒々しい戦時用語を使用することなく、いつも彼はおだやかに語りつづけ」ただけに、「うちに籠る愛情や憎しみは強かつた」のに対し、長篇『憩園』は、抗戦首都重慶で出版されたと思えないほど、「まるで戦時社会ときりはなされ、弱々しい平穩の光りの下に照し出された家庭の谷間をのぞき込んでゐるやうな氣さへ」し、「この作家的となみの裏に、憔悴して悔いず、追求して沈み込み、自己革新を行ふ巴金の路があつたのではなからうか」とし、「天を悲しみ、人を憐れむ」の心によって生み出された「モナ・リザ」や「ある夫婦」の作品と「共に静寂のおもむきを持つてゐた」と評す。然し巴金に比して、茅盾の「腐蝕」、「清明前後」、「子夜」は「抗戦地区内の人物や經濟の否定的な面を描寫してゐる」もので、「動搖變形する中國の各階層を、遠慮のない、ゴシゴシ洗ひ出すやうな筆つきで書いてゐた人である」と喝破する。最後に極めてリアルな表現で、次のように概括する。「茅盾が敢てかかる主張をするのは、現實追求のみが、作品の貧血性を防ぎ得る、他はすべてむなし、と信じてゐたからである。郭沫若が雲低き空を蘇聯へ飛行し、巴金が静寂の中に坐り込んでゐる間に、彼はまた暗黒題材と取り組んでゐたのである。それによつて彼自身の小説高樓に登り、中國天涯の路をきはめんとしてゐたその樓はアメリカに面した林語堂の樓とは異つてゐたがやはり世界と中國文學の雲界に迫つてゐた」と。

洗練で透徹した「中國文學と世界」論は、眼光紙背に徹した中国文学作品への耽讀と深い中国古典の教養が結実した評論と言えよう。魯迅、蕭軍を含め、上に挙げた数々の当時の中国文壇の代表的な作家と作品を「独上高樓、望尽天涯路」、「衣帶漸寬終不悔、爲伊消得人憔悴」といった究極な文學的境界で捉えようとする試みに「中国文學研究家」²⁴ならではの醍醐味が見出せるのである。そしてその背後には、「中國文學の世界性は……只單に中國作家が東西南北に旅し、世界に四散することによつて達成せられるものではな」く、「世界的な接觸面に於て、眞に文學的であり得るといふ條件がついて」いるものであり、時にそれは、「きはめて中國的なるもの、風土的なるもの、特殊的なるものが、かへつて世界性を得てゐる場合がある」との思考が沈潜しており、戦時という特殊な環境下におい

での中国での実体験があったことが看過できないであろう。武田は最後に「私は日僑の腕章をつけてひとり街を歩く時、外套をかぶつて畳の上に横はる折、以上の諸作家が思ひ思ひの動力を駆使して、中國文學の世界性のために奮闘する水滸傳的宇宙を胸に描いて、いささか心楽しくなることもある。そしてやはり文學はいいな、読めばわかるから、と私は私なりに中國現代文藝樓を想像して満足する」と締め括る。

武田泰淳は戦後において、小説家だけでなく、評論の名手としても健筆をふるい続け、戦後派文学者としての地位を不動のものにした。ここにその評論の原型ともいべきものが見え隠れする。彼の文学を語るうえではよく「悲愴」、「滅亡」、「不気味な暗さ」、「大きな混沌」、「贖罪」などのキーワードが躍動するが、こういったものの背後には、彼の「地獄」を見たような戦争体験や上海で迎えた敗戦体験を抜きにしては語れないに違いない。こうした体験が彼の幼少期に親しんだ中国の古典や魯迅中国現代文学の教養と融合して彼独自の人生観、文学観、諦観を形成し、長く彼の文学生涯に影響し続けたのであろう。

むすび

今回紐解いた戦時終戦直後に上梓された邦字誌『亞細亞』と『新生』は重厚な時代感触を以て嘗て暗雲が立ち込めていた亜細亜の一隅を照射して見せてくれた。そこに硝煙弾丸の痕跡を感じさせられながらも、文化の伝播、文学的営みも少なからずあったことは否めない。その価値を十分に認め、歴史に埋もれることなく後世に伝え、受け継がれていくべきだとは言を俟たない。

注

¹ 『亞細亞』創刊号については、いわき市立草野心平記念文学館に原本（縦20.6cm、横14.1cm）の所蔵が確認されており、また、『上海の日本人社会とメディア』（岩波書店、2014年10月）に於ける西村将洋氏の同誌創刊号に関する紹介や「戦争の世紀を生きた二人の『マドモアゼル・M』の物語・序説―室伏クララと村尾絢子の上海時代―」（『早稲田文学』2018年初夏号）に於ける大橋毅彦氏の言及などが見られる。ただし、第二号は中国にも日本国内にも今日まで未見。後述のように、第三号の存在も囁かれているが、確認されていない。

² 1942年11月から1944年4月にかけて南京で発行された邦字文化誌。本稿の執筆にあたっては、

『黄鳥』復刻版（大橋毅彦・鈴木ひとみ解題、三人社、2018年12月）を参照した。

- ⁱⁱⁱ 『黄鳥』と『亞細亞』の共通の同人に草野心平、岩井五郎、上路忠雄、会田綱雄がいて、例えば、草野には「亞細亞のあらゆる地點に働くわれら」、「生きて大亞細亞バラ色の夜明をよぶ」（「噫！軍神加藤建夫少將」『黄鳥』創刊号〈前出復刻版〉）、「亞細亞の大きな春はめぐり……亞細亞百年の苦しみの涯。亞細亞百年の忍従の涯。亞細亞百年の屈辱の涯。……屈辱のはてに亞細亞は一致團結した。……亞細亞の春に。」（「還都三周年を記念す」前掲『黄鳥』第三号）、岩井五郎には「巨きな亞細亞がもりあがってくる。」（「重慶軍無名兵士へ」前掲『黄鳥』第二号）等の詩句が見られる。また『黄鳥』には、日本人以外に多くの中国文化人の作品が散見される。のちの『亞細亞』の「詩壇消息」と裏表紙裏でも中国の詩人や詩集の情報を発信していることがわかる。
- ^{iv} 「年表」（『草野心平全集』筑摩書房、昭和53年-59年）や川鍋東策「田村俊子を繞る詩人たち」（『歷程』1968年6月、11月）に『亞細亞』通巻三号の記述があるが、現在のところ、第三号の有無が確認されていない。
- ^v 戦時下紙の供給不足による書誌発行の窮状について多くの言及があるが、例えば前掲『黄鳥』第四号の石川信雄記「編輯後記」では、『黄鳥』発行の減頁には「もう一つはやはり紙の問題である」とあり、『亞細亞』でも創刊号の奥付では「定價二十元」とあったのが、第二号では「定價四十五元」と倍以上に高騰していたことがわかる。直近の論説では、秦剛氏「戦時末期の上海で発行された『大陸』——歴史に埋れた〈外地〉の日本語総合誌」（『早稲田文学』2018年初夏号）に詳しく論じられている。
- ^{vi} 『黄鳥』第六号への投稿予定だった文章か。
- ^{vii} 須田禎一著『独絃のペン・交響のペン——ジャーナリスト30年』（勁草書房、1969年）「再び上海へ、そして敗戦」（70-72頁）に拠る。
- ^{viii} 文中前掲『堀田善衛上海日記〈滬上天下一九四五〉』（紅野謙介編著、2008年11月、集英社）では、堀田善衛の遺品に次のような『新生』の入稿メモと思われる「原稿受入簿」が発見されたことに触れている。そこにも「堀田善衛『文学の立場』」と記されているから、この事実を裏付ける形となった。

原稿受入簿

日付	著者	題名	頁	字数
1・11	塚本助太郎	美しき東洋の友情	6	
〃	内山完造	岡目ノ報告	6	
1・12	堀田善衛	文学の立場	16	
〃	武田泰淳	中国文学と世界	20	
〃	磯田進	会議の精神	22	
1・14	沖田一	往時の上海渡航	10	
〃	戸塚廉	中国の子供会	8	
〃	加田哲二	日本の民権思想	13	
1・15	小畠実	黒うた鳥	4	1600

ク16	西崎哲夫	詩・文芸復興	3
ク	郭沫若	人民大衆に見習ふ	7

^{ix} 『新生』の目次と本章との間では、整然性に欠けている箇所が多いため、大方頁順は目次に従い、題目等の表記や目次にないものは本章に従って適宜調整を施した。

^x 崔海燕「谷崎潤一郎の読んだ林語堂の *Moment in Peking*」(『比較文学』日本比較文学会、2009年)を参照されたい。

^{xi} 『新生』創刊號の執筆者紹介欄には中国文学研究家として武田泰淳の名があがっている。

付記

本稿は引用に際して旧漢字、旧仮名をそのままとし、人名、固有名詞もこれに準じた。